

(Ⅳ-16) 地方中核都市における「都市の魅力」の定量化に関する研究

法政大学 学生員 ○ 岡田 栄成

法政大学 正会員 渡部与四郎

1. 研究の目的 都市とは、多くの人が集まっているところで、かつ集まらなければならない所である。ではなぜ人々は都市に憧れ、定住したいと思うのであろうか。その都市の魅力、即ち人間を引き付ける不思議な力とは一体なんだろうか。従来、その魅力を経済的手段的要因で求めてきたが、何となく引き付けられる社会的・心理的な魅力についてはあまり触れられていない。真実に迫るためにはこの後者の根底を探る必要があると思われる。

同様のものに、「住みよさ」¹⁾や「アメニティ」といった概念のものがあるが、新たに「魅力」といった総合評価によって都市というものを定量化することを目的とする。

2. 魅力の定義 「都市の魅力」²⁾および「13ヶ国価値観調査データ・ブック」³⁾に基づき、都市の魅力を定義付けする。一般に、都市の魅力は「働きやすさの魅力」「住みよさの魅力」「暮しやすさの魅力」などの人々が感じ取る様々な憧れを総称する言語である。よって、魅力を定義づけるにはあらゆる方面から調査する必要があると思われる。この研究では、その多岐にわたる項目を、従来から注目されてきた経済的魅力に加え、自然と人を引き付ける無意識の魅力を生活的魅力、文化的魅力、社会的魅力として定義付けし総合的な評価を試みる。

一言で都市の魅力とはいっても、それは大きく分けて、人間を引き付ける魅力と、住んでいる市民を離さない魅力とがある。本研究では住民に対して調査を行うため、後者に重点を置く。

また、都市規模によっても市民の感じる魅力は異なる。百万都市のような大都市においては、その魅力の多さ故に多く議論されてきた。また、中小都市では魅力が少ないのか、どちらかといえば人口の流出が目立ち、住民を離さない魅力は少ないと思われる。よって、本研究では、地方の中心をなす都市（地方中核都市及び県庁所在都市）に注目し、その根底にある魅力を追求する。

3. 研究の方法 研究の方法は図-1に示す。（本概要では内容一部省略）

都市の本質的な魅力を探るには、住民の感じる心理的な要素を知る必要がある。そのために、住民にアンケート調査を行うことにした。アンケート調査を行うに当たり、その結果は、地方都市の性格を最大限に網羅する必要がある。よって、対象地区となる都市をいくつか選定する必要がある。それを決定する手段として、中核都市（20万～100万人の人口規模）といわれる93都市（ただし20万人以下でも県都は含む）について、都市の性格を表すと思われる27の指標を用いて主成分分析を行い、都市の類型化を図った。その結果、主成分は4つ選出された。

主成分1 ----- 都市基盤集積の差異 主成分2 ----- 商業活動の差異

主成分3 ----- 都市化の差異 主成分4 ----- 産業水準の差異

この4主成分によって、93都市は16グループに分類された。

対象地区は、地方都市の魅力に定義付ける際の偏りをなくするために、性格の異なる3都市を選び出すこととした。

まず、都市基盤の集積は遅れているが、商・産業活動が盛んで都市化も進んでいる都市。つまり、地方都市として今後の伸びが期待されている都市群の中から、県都ではないが海や湖などの豊かな自然に恵まれ、気候温暖で独自の産業を持ち、周辺地域の中核を為している50万都市浜松市を。次に、商・産業活動が盛んであるが都市基盤集積が遅れ都市化が停滞している都市。すなわち、産業はあるが今一歩伸びきれない都

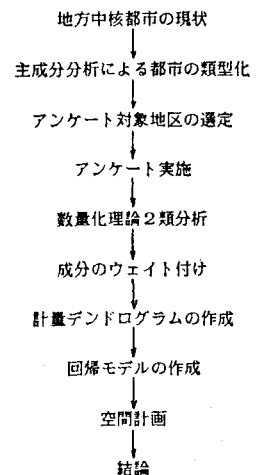


図-1 研究のフローチャート

市群の中から、大都市圏周辺にある県都で山と川に恵まれ、古くから伝わる伝統産業と歴史があるにもかかわらず、人口と産業が伸びきれない40万都市岐阜市を。そして、商・産業活動及び都市基盤集積・都市化のいずれも遅れている都市。言い換えればより一層の努力を必要としている都市群の中から、大都市近郊の県都で山と湖に恵まれ、古くから水産・水運の拠点として発展してきたが、行政区画が災いし、大都市のベッドタウン化によって自立性に欠けるが、全体的には今後の発展が期待される20万都市大津市をそれぞれ抽出することにした。

アンケート調査の質問項目を決定する根拠として、前述の「都市の魅力」を参考にする。アンケート項目を作成するにあたり、生活的魅力、文化的魅力、社会的魅力、そして経済的魅力を構成要素とし、さらに生活的魅力は居住の魅力・生活の利便・余暇の魅力に、文化的魅力は文化生活・就学会機・流行結合に、社会的魅力は社交の機会・恋愛結婚の機会・社会参加の魅力・人間解放にと、それぞれ細分化して、それに準じて細分構成要素を作成した。

4. 「都市の魅力」計量評価モデルの構築

生活・文化・社会・経済の各構成要素のウェイトを決定するため、外的基準を全体及び各主要構成要素に対する5段階の満足度として数量化理論2類分析を行った。そして、ウェイトの高かった要素を数個抽出し、それらによって再度数量化理論2類分析を行う。次に、各構成要素に対する偏相関係数に比例し、かつ総合的魅力が1,000になるようにウェイト付けをした。

これらの結果を示したのが、図-2の「都市の魅力」評価の計量デンドログラムである。

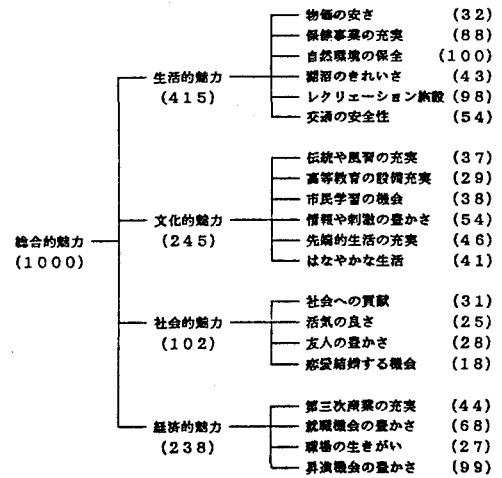


図-2 計量デンドログラム

5. 結果の考察 分析の結果、地方都市の魅力を実感付ける際には、生活的魅力、つまり、日常生活の暮しやすさを求める声が多いことが解った。中でも、山林などの自然環境の保全のウェイトが最も高く、健全な生活や、余暇を楽しむためのレクリエーション施設の充実を望む声が高い。また、以前から注目されていた経済的魅力の中では、昇進する機会が豊かであることが望ましいと検出された。そして、経済的魅力と同程度の要望を、自分の教養を深めるといった文化的魅力に求めていることも解った。逆に、社会的魅力のウェイトが低いことは、住民がある程度満足している事を意味すると思われる。

6. 結論 地方都市の魅力を実感デンドログラムという形で表現したわけだが、その構成要素に当たるものは都市があらかじめ持っている先天性的なものが多いことが解った。つまり、人々は住み着いたその土地に愛着を感じ、有るべき姿をそのまま受け止めようとする姿勢が知らぬうちに植えつけられていると考えられる。そして、都市のすべきことは、職の充実を図り、情報網を充実させ、余暇生活を豊かにする施設造りなど、住民の生活がいろんな面で充実するように施策を構えることであろう。そして、職住近接のバランスのとれた都市を目指すことが、中核都市の魅力とされるといえる。

7. 今後の課題 都市の魅力を高めるために、都市が実際にどのようなスパイラル的な施策を構えるべきかを細かく調査する必要性を感じる。そして、採算的な問題も含めて、「都市の魅力」を最大限にするモデルを構築することが今後の課題である。

【参考文献】 1) 定井喜明、増田勇人(1988年):「住みよさ」からみた都市基盤施設整備事業計画

の合理化に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, 第22号, PP181~186

2) 清水馨八郎・服部銈二郎(1970年), 都市の魅力, 鹿島出版会

3) 1980年国際価値会議事務局, 13ヶ国価値観調査データ・ブック, 日本IBM(株)